

「真の宝物とは～何を大切に生きるべきか～」

かながわけん じょうおうじ ふくじゅうしょく かめのげんしょう
神奈川県 静翁寺 副住職 亀野元彰

小学校2年生の長男が嬉しそうに帰宅してきました。

どうやら祖父にチョコレート菓子を3つ、兄弟の数だけ買って貰ったとの事。それは、私が幼少の頃大流行した、シールのおまけ付きのチョコレート菓子でした。長男と次男は早々にお菓子を平らげ、お気に入りの物にシールを貼っています。最後に三男が開けてビックリ大当たり。シールはキラキラ光る非常に希少な物で、童心に戻って喜ぶ父親や羨ましがる兄達をみて、三男は思わぬお宝を手に入れたとご満悦でした。

ところが暫くすると、「ちょっと貸して」「次は僕だ」とそのお宝が原因で大喧嘩。私は思わず「貴重なシールが破れたら大変だ」と親が預かる事にしてその場を治めました。

「ダルマさん」と親しまれる有名な禅僧の達磨大師は、南インド香至王家の3男でした。ある時、後に大師の師匠となる般若多羅尊者が、父王から受けた宝珠を指し「この宝珠に及ぶ宝はあるか」と3王子の智慧を試しました。2人の兄は、「その宝珠こそ最上の宝だ」と答えたのに対し、少年の達磨大師は「これは世宝（世俗の宝）で最上の宝ではない。法宝が最上の宝である」つまり仏の教えこそが最高の宝であると答えたと伝えられています。

宝石、お金、名誉…皆が欲しがると世宝は数多にあります。ただ世宝は手にした者しか恵みません。それ故に求める者同士が競い争うのです。しかしそれらは本当の宝なのでしょうか。世宝を手にした人は、一度は有頂天になりますが、奪われないよう人を疑ったり、不安になったり、争ったり、更に欲しくなったり…そんな心にさせられる物は「真の宝」といえるのでしょうか。真の宝とは、手にした者も、それ以外の者も全てに恵みを与える物である筈です。

仏の教えは、実践する者の心に安らぎをもたらす、物に執着する事なく皆で譲り合い、和合する。関わる全ての者を恵む真の宝なのです。

私が大切にすべき宝は、物に執らわれず、家族仲良く譲り合う和合の姿でありました。何を宝として生きるべきなのか、今月(10月)5日は達磨大師のご命日。秋の夜長に深く自らの行いを省みたいと思います。